

2021年5月30日 礼拝説教要旨

詩編講解説教62「救いの岩」

詩編62：2～9、マタイ16：15～18

詩編第62編は比較的馴染みのある詩編の一つかもしれません。2節「わたしの魂は沈黙して、ただ神に向かう」ここは口語訳で覚えていらっしゃる方々も多いのではないのでしょうか。「わが魂はもだしてただ神を待つ」もだして、沈黙して待つ。そこに一つの信仰者の生き方が表れていると理解されます。これは静と動で言えば静であり、どんな逆境、試練の中にありましても、落ち着いて、動じることなく、その困難に立ち向かっていくことができる。そういう強さを信仰者は持っていることを表しています。

この詩人はかなり厳しい状況に置かれています。「お前たちはいつまで人に襲いかかるのか。亡きものにしようとして一団となり、人を倒れる壁、崩れる石垣とし、人が身を起せば、押し倒そうと謀る。常に欺こうとして、口先で祝福し、腹の底で呪う」（4、5節）この背景にはおそらく近い人、仲間、友人から裏切られるという経験があります。この詩人がダビデということならば、ダビデの成功を羨み、妬むサウルとの確執を考えることができます。また家族や仲間といった近い者の中にその地位を狙う者がいる。ダビデは自分の息子アブサロムから命を狙われるということがありました。これは辛いことでしょう。「口先で祝福し、腹の底で呪う」うわべは親しく振舞っても、内心は人を陥れようと狙っている。そういうドロドロとした人間関係を嫌というほど見てきたのです。それはわたしたちも同じでしょう。妬み、嫉妬に支配されることがある。人の成功を素直に喜ぶことができない。口先では「おめでとう」と言いながらも、内心は穏やかではない。そういう醜さを抱えている。「人が身を起せば、押し倒そうと謀る」それで人を傷つけ、また自らも傷つきながら、ある時は自己嫌悪に苛まれながら、わたしたちは生きているのではないのでしょうか。

そういう中で、ともすると感情的になり、自制心を失い、相手を攻撃しかねない。しかしその魂は静かである。沈黙しているというのです。ちょうど台風目のようにそこだけ穏やかな部分がある。原文を見ると2、3節と6、7節の繰り返しの部分には「アク」という接頭語が付いています。カルヴァンはこの接頭語について「それでもなお」「にもかかわらず」というふうに訳したいと述べています。問題は依然とあるのです。現状が回復しているわけではない。「それでもなお」「にもかかわらず」わたしの魂は沈黙して神に向かう。そこでこそその人の魂は平静である。そういう内なる平静さがある。それが信仰者の特権であり、わたしたちは少なからずそういう経験をするのです。

人生でたくさん問題を抱えてしまう。背負いきれない問題に押しつぶされそうになる。でも神さまに委ねる時に、心に平安がある、ふと肩の荷が下りたような感覚を覚えることがあります。5年前の地震の時もそうでした。確かに状況は悪かったのですが、にもかかわらず不思議とあまり不安は感じませんでした。なんとかなる。人間的にはほとんど根拠のない自信のようなものがありました。実際に多くの教会の支援によって支えられました。福音書に嵐の湖の話があります。舟が揺れ、弟子たちが慌てふためく中、キリストは眠っている。キリストの中にある安心、平静さというのはそういうことなんだと改めて実感した経験でした。

先週、『にしきヶ丘』の最新号が発行されました。毎号、教会員の信仰の証を読むのを楽しみにしていますが、今回も一人の青年の証を読み、改めて神さまの救いについて教えられました。彼はこのように書いています。「嘘のような現実の話ですが、何一つ壁が無いかのように救いが隅々まで満ち渡り、私の荒れに荒れ果てたこれまでの人生が、着実に景色を変え、整い直され、新たな道が目の前に現れました」最後このように結びます。「先の私に何が待っているのか、神様が何を計画されているのかを楽しみに生きていきます」おそらく依然と問題はあるのです。それでもなお、将来を楽しみに生きる。それはその魂が神さまに向かっているということです。そこでこそ魂は安らう。現実は厳しくどんなに揺らいでも、確かなところを持つことで、それでもなお、見える景色は変わる。神さまに望みをおくということはそういうことなのです。

それは神さまが決して動かない確かな存在だからです。わたしたちは揺れ動くでしょう。でも神さまの恵みは変わらない。救いの約束は変わりません。それが神さまの慈しみ（ヘセド）です。そのことをこの詩人は「岩」という言葉で言い表しております。「神こそ、わたしの岩」（3、7節）このような表現は新しいものではありません。この後も詩編では繰り返し「岩」という表現が出てきます。それだけ神さまの救いが確かであること、動かないことを詩編は繰り返し示します。そしてその不動の救いがいよいよはっきりと表されたのが、イエス・キリストの出来事です。キリストはあの十字架とよみがえりの御業を持って、わたしたちの救いを不動のものとしてくださいました。わたしたちは洗礼を受けて、この変わらない恵みの中に人生を据えるのです。

今日はマタイ福音書のペトロの信仰告白のところをあわせて読みました。ここにも「岩」が出てきます。ペトロが「あなたはメシア、生ける神の子です」（16：16）と信仰を言い表した時に、主イエスは「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」（16：18）とおっしゃった。イエス・キリストをまことの神さまと信じて、その信仰を言い表して洗礼を受ける時に、わたしの人生はキリストという岩の上に据えられます。キリストの体なる教会に結ばれ、絶えず御言葉に与る中でわたしたちの魂は困難の中でも静まり、それでもなお平安のうちを歩むことができる。これはまことに幸いなことであります。